

北宋の三司の性格

著者	周藤 吉之
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	18
ページ	1-37
発行年	1966-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/11076

北宋の三司の性格

周 藤 吉 之

一 序 説

二 三司使の変遷

三 三司の人吏と諸局吏の賽神会

四 衙吏の大將・軍將

五 結 語

一 序 説

北宋において三司が国家財政を統轄して、民政を司る中書省と軍政を掌る樞密院と並んで、中央政府の重要な官庁を構成していたことは、今更いうまでもないところである。この三司は唐末五代に発展した節度使体制と同じ構成をもっていて、使・副使・判官・推官が置かれ、その下に孔目官系統の人吏や都押衙等の衙前系統の軍將・大將があり通引官・客將等もあった。⁽¹⁾三司は塩鉄・度支・戸部の三部に分かれて、財政の収支を分掌したが、その外に勾院・都磨勘司並に帳司・都理欠司・都憑由司・衙司・開拆司等の所謂子司も置かれて、帳簿の検査・欠税の督促・証書の照合・雑役の管理・文書の受発等を掌った。これらについては已に発表した処もあるので、ここでは特に三司使の人選の変遷と三部及び子司の人吏並に衙司に属する軍將・大將について述べて、三司の性格を一層明かにしたいと思う。三司使は五代の制を承継いたもので、宋初にはこれは武官が多く任用されたが、中期以後には全く文官がこれに

なった。そして三司使から執政になるものが多かったが、神宗朝になると、その地位が低下してきた。又三司の人吏はその人数が頗る多く、賄賂を多く取ったので、宋初には人員整理が行われたが、やがてこれら人吏の激しい抵抗に遇って、これもあまり行われなくなった。それは人吏が守護神を祭るなどして、團結を図って共同の利益を守っていたためであったと思われる。又軍將・大將は漕運・牧養・河川工事・軍匠の教育・店宅務の管理・酒坊の経営・倉庫の主管等を行っていて、衙司が軍將・大將のこれらの役の輕重を計って、それを公平に分担させていた。

以下これらのことについて詳述することとする。

二 三司使の変遷

三司使は塩鉄・度支・戸部の三部を総べたものであって、五代の後唐の明宗・長興元年(930)以後置かれ、宋もこの制を踏襲した。然し宋初にはこの制も幾度か改変された。即ち太宗の大平興国八年(983)三月には三司使を罷めて、塩鉄・度支・戸部の各使が置かれた。然るに同じ太宗の淳化四年(993)十月には全国を十道に分って左計・右計の兩使が置かれ、同年閏十月には左右計を統轄する總計使が設けられた。然るに同五年十二月にはこれらの總計使・左右計使は廃止されて、再び塩鉄・度支・戸部の各使が置かれた。然し真宗の咸平六年(1033)六月になってこれらの塩鉄・度支・戸部の各使は罷められて、これらを統轄する三司使が置かれ、各部に塩鉄副使・度支副使・戸部副使が置かれた。これより後、神宗の元豐五年(1082)に三司が廃止されるまで、三司使が置かれていたのである。³⁾

そこで以下まず太祖朝から真宗朝に至るまでの三司使の姓名とその前官及び転官の次第を表示すると、次の如くである。

年	前官	三司使	転官
太祖			
建隆元・四			
同・八			

宣徽北院使三司使張美

右監門衛大將軍三司使李崇矩(4)

(定国節度使)(1)

北宋の三司の性格（周藤）

乾德二・正	前泰州刺史	宣徽北院使判三司李崇矩	樞密使	(5)
同二・四		左監門衛大將軍權点檢三司趙毗	(罷免)	(8)
開宝二・二		大内都部署判三司事沈倫		(10)
同四・五	軍器庫使	左驍衛大將軍權判三司楚昭輔		(12)
同五・十一		參知政事兼提点三司淮南湖南嶺南諸州水陸轉運使事薛居正		(13)
		參知政事兼提点三司荆南劍南諸州水陸轉運使事呂余慶		(13)
		判三司楚昭輔	樞密副使	(14)
同六・九	倉部郎中知制誥	權点檢三司公事張滂	(死)	(15)
同七・六	左衛大將軍	權判留司三司兼知開封府王仁瞻		(17)
同九・三				
太宗				
太平興國七・二		宣徽北院使判三司王仁瞻	右衛大將軍	(23)
同	給事中	同判三司侯陟	(死)	(23)
	右諫議大夫	同判三司王明	參知政事	(24)
同八・三	右諫議大夫同判三司	右諫議大夫同判三司宋琪	(知并州)	(24)
同	右衛將軍	塩鉄使王明	(死)	(24)
	如京使	度支使陳從信	(死)	(24)
		戸部使郝正		
	客省使	左諫議大夫權度支使許仲宣	(知広州)	(24)
雍熙元・九	(知荆南府)	塩鉄使張平	(死)	(28)
同四・四	度支使	塩鉄使張遜	(知澶州)	
同四・十	戸部使	度支使魏丕	(黃州刺史)	
同五・二	度支副使	右諫議大夫戸部使李惟清	簽書樞密院事	
端拱二・七	(知広州)	塩鉄使張遜	(罷免)	
淳化元年		左諫議大夫戸部使徐休復		

淳化二・四

同二・四

同二・九

同三・二

同三

同三

同三・四

同四・五

同四・十

同

同四・閏十

同五・十二

真宗

咸平元・十

同元年

同二・閏三

同二

同三・正

同三・三

同四・五

同

同

同五・七

度支使

(河北都轉運使)

右諫議大夫戸部使

知審刑院

塩鉄使

(樞密都承旨)

(東上閤門使勾当軍頭
引見司)

河北轉運使右諫議大夫

戸部使

(知審刑院)

右諫議大夫戸部使

度支員外郎

(知制誥)

塩鉄使給事中陳恕

給事中塩鉄使李惟清

給事中戸部使樊知古

塩鉄使魏羽

度支使李昌齡

戸部使張雍

左諫議大夫魏庠(9)

判三司魏羽

左計使魏羽

右諫議大夫右計使董儼

工部侍郎總計使陳恕

塩鉄使陳恕

度支使王延德

左諫議大夫戸部使張鑑(10)

塩鉄使陳恕

權戸部使上官正

戸部使索湘

度支使魏羽

戸部使工部侍郎雷有終

度支使刑部侍郎張雍

塩鉄使張雍(11)

塩鉄使王嗣宗

右諫議大夫戸部使王子與

右諫議大夫度支使梁鼎

右諫議大夫度支使梁鼎

參知政事

(知広州)

(罷免)

(御史中丞)

(知梓州)

(知揚州)

(舒州團練使知郢州)

(知広州)

(知滄州)

(罷免)

(解職)

知益州

(罷免)

(罷免)

(知通進銀台司兼門
下封駁事)

(死)

(罷免)

(罷免)

(罷免)

(罷免)

(罷免)

(罷免)

(罷免)

(罷免)

(罷免)

(罷免)

(罷免)

(32)

(32)

(33)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

(34)

同五・九	(河北巡檢使)	右諫議大夫戸部使梁灝	(同知審官院)	(52)
同五	(權判吏部流内銓)	右諫議大夫度支使薛映	(知杭州)	(55)
同六・六	刑部侍郎權知開封府	兵部侍郎三司使寇準	同中書門下平章事	(57)
景德元・八	樞密直學士工部郎中	三司使寇準		(57)
同元・八	刑部員外郎知制誥	權三司使公事劉師道		(60)
同二・五		右諫議大夫權三司使丁謂		(71)
大中祥符二・二		樞密直學士三司使丁謂	參知政事	(78)
同五・九		三司使禮部侍郎丁謂		(82)
同五・九	塩鉄副使右諫議大夫	權三司使林特		(83)
同七・三		給事中林特		(85)
同七・十一		工部侍郎三司使林特	戸部侍郎同玉清昭 應宮副使	(92)
同八・八	太常少卿	右諫議大夫權三司使馬元方(12)	(權知開封府)	
天禧二・七	樞密直學士刑部侍郎	三司使李士衡		

- (1) この表は主に「統資治通鑑長編」と「宋史」の中のこれらの人々の列伝と宰輔表とによって作成したものである。この表の中の末段の括弧の中の数字は長編の巻数を表わすものであり、又括弧の中の官職名や罷免等は「宋史」の列伝によって補ったものである。これらのことは以下の表でも同様である。
- (2) 上記のもの以外の史料は註で説明している。

これを見ると、太祖朝には三司使九人の中、張美・李崇矩・趙玘・楚昭輔・王仁瞻等五人の武官が三司使になっていた。これは五代の制を踏襲したものである。太宗朝になると、三司使二十二人中、王仁瞻・陳從信・郝正・張平・魏丕・王延德等六人の武官が三司使或は塩鉄使・度支使・戸部使になっていた。この頃になると、文官が多く三司使又は三部の各使になるようになった。真宗朝になると、三司使十九人中、武官は初期の王延德・上官正の二人だけであって、その他は皆文官であった。このようにして真宗朝の中頃以後には三司使は皆文官になることになったのである。このことについては「統資治通鑑長編」^{卷一}九六仁宗・嘉祐七年(1062)五月丁未の知諫院司馬光の上奏にも、

国初三司使、或以諸衛將軍・諸司使爲之、判官則朝士曉錢穀者、皆得爲之、不必用文辭之士也、とあって、太祖朝や太宗朝には、三司使には諸衛將軍や諸司使（宣徽北院使・如京使・客省使・東上閣門使）等が多く任命され、その下の判官には錢穀に通ずる士が選ばれたといわれている。然し太宗朝から文官が多く任用され、真宗朝以後にはこれが専ら用いられることとなったのである。

又「宋史」職官志・三司使によると、

三司之職、国初沿五代之制、置使以總国計、応四方貢賦之入、朝廷不預、一歸三司通管、塩鉄・度支・戸部、号曰計省、位重執政、目爲計相、其恩數廩祿、与參枢同、

とあって、三司使は国家の財政を總轄して、三司は計省といわれ、三司使の位は執政即ち參知政事や樞密使・副使・知樞密院事・同知樞密院事に次ぐもので、その恩數・廩祿は執政と同じであつたようである。更に南宋の洪邁の「容齋隨筆」続筆 卷三 執政四入頭には

国朝除用執政、多從三司使・翰林學士・知開封府・御史中丞進擇、俗呼爲四入頭、

とあって、宋では執政は三司使・翰林學士・知開封府・御史中丞から進擇したので、これを四入頭といったといわれている。従つて三司使は執政に進む近路をなしていた。前述の「宋史」職官志・三司には

使一人、以兩省五品以上及知制誥・雜學士・學士充、亦有輔臣罷政出外、召還充使者、使闕則有權使事、又闕則有權發遣公事、

と見えていて、三司使は兩省五品以上及び知制誥・雜學士・學士をもつて充て、使が欠ければ權三司使を置き、權三司使も欠ければ權發遣三司使を置いていた。

そこで前掲の三司使の表を見ると、權三司使は真宗の景德元年（1004）八月、樞密直學士工部郎中劉師道が權三司使公事になってから、この制が多く行われた。そして權發遣三司使はこの時期にはまだ現われていない。そして太宗朝から真宗朝の文官の三司使を見ると、左右諫議大夫が頗る多く、給事中も多少あり、工部侍郎・礼部侍郎・刑部侍郎・兵部侍郎等も見えている。この中、左右諫議大夫と給事中とは前述の兩省五品であるから、三司使には兩省五品以上が任ぜられたのである。ただ前述の如く景德元年八月劉師道が樞密直學士工部郎中で權三司使になってから

は右諫議大夫でも樞三司使となっており、工部侍郎・礼部侍郎・刑部侍郎等の侍郎でもって、三司使に任ぜられるようになった。これらの点から見ると、この時期にはまだ前述の「宋史」職官志の三司使の条に「兩省五品以上及び知制誥・雜学士・學士を以て任ずる」とある中の「知制誥・雜学士・學士を以て充てる」というのは、ただ樞密直學士が多少見えるだけであるようである。尤も知制誥から諫議大夫になって、三司使になったものは、二人程見えて

いる。
更に前述の洪邁の「容齋続筆」で、「三司使は翰林學士・知開封府・御史中丞と共に、執政に進む近路である」といわれたことについて述べると、この表の文官の転官の中でも、三司使から直に参知政事・簽書樞密院事等の執政となり、真宗朝の寇準のように執政を経ないで直接に宰相になったものもあるが、それらの数は四人に過ぎない。従ってこの頃にはその数はそう多かったとはいえないようである。この表から見ると、むしろ三司使から地方の諸州の知州となって、外に出たものがかかなり多いようである。

次に仁宗朝から英宗を経て、神宗の元豊五年五月に官制改革が行われて、三司が廃止されるまでの三司使をあげると、次表の如くである。

仁宗

乾興元・十一

天聖元・正

同三・九

同四・八

同四・十二

同六・三

同六・三

同七・二

同七・三

同八・九

(樞知開封府)

(陝西安撫使)

(祠部員外部知制誥)

樞密直學士右諫議大夫

知益州

(知秦州)

河北転運使給事中

三司使尚書左丞李士衡

樞三司使李諮

翰林學士樞三司使李諮

右諫議大夫樞三司使范雍

樞密直學士右諫議大夫樞三司使范雍

樞密直學士右諫議大夫樞三司使范雍

樞密直學士右諫議大夫樞三司使范雍

樞三司使薛奎

樞三司使寇瑊

樞三司使胡則

知相州

知洪州

樞密副使

参知政事

(樞知開封府)

(99)

(100)

(104)

(104)

(104)

(106)

(106)

(107)

(107)

(109)

北宋の三司の性格(周藤)

法政史学 第一八号

同九・七
明道元・八
明道元・十二
同二・四
同二・四
同二・十
同二・十
景祐元・二
同元・五
同三・八
同四・四
宝元元・三
同元・三
同元・十二
同元・十二
康定元・三
同元・三
同元・九
同元・九
慶曆元・五
同元・五
同三・四
同三・四
同六・正

(御史中丞)
(勾当三班院)

權御史中丞

右諫議大夫權御史中丞

翰林侍讀學士兼龍圖閣學士工部侍郎權知開封府

(知大名府)

戶部尚書知應天府

刑部尚書兼御史中丞

龍圖閣直學士起居舍人

右正言知制誥

陝西都轉運使龍圖閣直學士

翰林學士兼龍圖閣學士兵部員外郎

權三司使胡則

三司使兵部侍郎晏殊

樞密直學士權三司使李諮

樞密直學士禮部侍郎權三司使李諮

龍圖閣學士權三司使蔡齊

權三司使蔡齊

龍圖閣直學士權三司使范諷

龍圖閣學士范諷

三司使程琳

三司使吏部侍郎程琳

三司使程琳

龍圖閣直學士給事中權三司使王博文

三司使夏竦

三司使夏竦

三司使晏殊

三司使刑部尚書晏殊

權三司使事鄭戢

權三司使事鄭戢

龍圖閣直學士起居舍人權三司使葉清臣

權三司使葉清臣

權三司使姚仲孫

權三司使禮部侍郎姚仲孫

兵部郎中權三司使王堯臣
翰林學士兼龍圖閣學士戶部郎中知制誥王堯臣

八

知陳州

樞密副使

樞密副使

樞密副使

(管勾祥源觀)

參知政事

同知樞密院事

知永興軍

知樞密院事

同知樞密院事

知江寧府

知蔡州

群牧使

(158) (140) (140) (132) (132) (128) (128) (126) (126) (122) (122) (121) (121) (120) (119) (114) (114) (113) (113) (112) (112) (111) (111) (110)

北宋の三司の性格（周藤）

同六・十一	（御史中丞）	翰林学士兼竜図閣学士権三司使王拱辰	知亳州	159
同六・十一	右諫議大夫権御史中丞	翰林学士権三司使張方平		159
同八・四	（体量安撫使）	端明殿学士給事中権三司使明鑑	参知政事	164
同八・四	翰林侍読学士戸部郎中	翰林学士権三司使葉清臣		164
同八・四	知永興軍			164
皇祐元・三	端明殿学士給事中	翰林学士権三司使葉清臣	知河陽府	166
同元・三		権三司使張堯佐		166
同元・九		礼部侍郎三司使張堯佐		167
同三・閏十一		三司使戸部侍郎張堯佐	宣徽南院使	169
同三・閏十一	（御史中丞）	枢密直学士権三司使田況		169
同五・九		権三司使翰林学士兼竜図閣学士給事中田況		175
同		礼部侍郎三司使田況		176
至和元・二		礼部侍郎三司使田況	枢密副使	176
同元・九	（権知開封府）	権三司使翰林学士兼端明殿学士翰林侍読学士礼部侍郎知制察楊察	提举集禧觀事	177
同元・九		三司使吏部侍郎王拱辰		177
同元・十一	翰林学士承旨兼端明殿			177
同元・十一	学士侍講学士戸部侍郎	権三司使事楊察	判并州	180
同二・六		三司使尚書左丞王拱辰		180
同二・六	翰林学士承旨端明殿学			180
同二・六	士翰林侍読学士戸部侍郎	三司使楊察		180
嘉祐元・七		三司使戸部侍郎楊察	（死）	183
同元・七	武康節度使知相州	工部尚書三司使韓琦		183
同元・八		工部尚書三司使韓琦	枢密使	183
同元・八	端明殿学士兼竜図閣学	三司使張方平		183
同元・八	士吏部侍郎知益州	三司使吏部侍郎張方平	知陳州	189
同四・三				189

同四・三

端明殿学士兼翰林侍读
学士吏部侍郎集賢殿修
撰

同四・三

右諫議大夫權御史中丞

同六・四

(知泉州)

同八・三

英宗

治平二・二

竜図閣直学士工部侍郎

同二・二

同二・七

端明殿学士兼翰林侍读
学士戸部侍郎權知封府

神宗

治平四・九

(知諫院)

同四・十一

熙寧元・正

(知太原府)

熙寧中

同二・八

同三・七

同三・九

同三・九

同三・十

同三・十一

天章閣侍制知定州

三司使宋祁

三司使朱祁

枢密直学士權三司使包拯

權三司使右諫議大夫包拯

給事中三司使包拯・三司使包拯

翰林学士權三司使蔡襄

三司使給事中蔡襄

權三司使呂公弼

權三司使呂公弼

權三司使韓絳

三司使吏部侍郎韓絳

宝文閣直学士權發遣三司使公事邵必 (14)

竜図閣学士給事中權三司使唐介

權三司使王陶 (15)

權三司使吳充

知制誥權三司使吳充

翰林学士權三司使吳充

翰林学士右司郎中權三司使吳充

權發遣三司使李肅之

天章閣侍制兼權發遣三司使事李師中

權發遣三司使李師中

權三司使李肅之

知鄭州

枢密副使

枢密副使

知杭州

枢密副使

枢密副使

枢密副使

(知成都府)

参知政事

(知蔡州)

枢密副使

知舒州

これを見ると、仁宗朝以後にも三司使は皆文官であつたが、これらの中では権三司使が頗る多くて、三司使は少く、權發遣三司使も見えている。そして権三司使には右諫議大夫や給事中の両省五品官及び工部侍郎・礼部侍郎・戸部侍郎の所謂兩省五品以上のものも任ぜられたが、右諫議大夫以下の官である右司郎中・戸部郎中・起居舍人等も任

ぜられている。又三司使には礼部侍郎・兵部侍郎・戸部侍郎・吏部侍郎・尚書左丞・工部尚書・刑部尚書・戸部尚書等が任ぜられている。權発遣三司使は天聖四年(1026)に祠部員外郎知制誥程琳をこれに充てたのが始めであった。⁽¹⁷⁾その後にはあまりなく、神宗朝には三司使十五人の中、明かでないものもあるが、七人が權発遣三司使となっている。これらは起居舎人・工部員外郎等であった。

更にこの表を見ると、前述の如く「宋史」職官志・三司使の条に「使には兩省五品以上及び知制誥・雜学士・學士を以て充て、輔臣の政を罷めて外に出て、召還して使に充てたものもある」といわれているような知制誥・雜学士・學士等が見え、その中でも特に雜学士・學士が頗る多く見えている。この点から見ると、この「宋史」職官志の記事は仁宗・英宗の「兩朝国史」の職官志によったのではないかと思われる。更にこの事實は宋会要の食貨・戸部の条に引用されている「神宗正史」の職官志の三司に、

国朝以兩制・學士充、亦有前執政充者、

と見えている兩制即ち翰林學士(内制)と知制誥(外制)及び學士をもって充てるとあるのとも一致している。この表によると、兩制の中では翰林學士はかなり多いが、知制誥はそう多くないようである。なお翰林侍讀學士も見える。雜学士・學士では竜図閣學士・直學士が最も多く、端明殿學士は多くないが、樞密直學士はかなりある。更に神宗朝の權發遣三司使には翰林學士院の直學士院や雜學士・直學士の下職である天章閣待制・宝文閣待制等が充てられていた。

以上述べてきたように、この表を見ると、仁宗朝以後には三司使には權三司使が多くなってきて、三司使が少なくなってきたおり、神宗朝以後には權發遣三司使が多くなってきている。このことは三司使の地位が漸次低下してきたことを表わすものである。

次に前述の如く洪邁は「容齋統筆」で、「三司使は翰林學士・知開封府・御史中丞と共に執政に進用される近路である」としており、これについて前表の転官の条によって、この時期の三司使を見ると、まず仁宗朝では三司使二十六人の中、三司使から直接に宰相になったものはないが、三司使から直に參知政事及び樞密使・副使・知樞密院事・同知樞密院事等の執政になったものは十二人即ち全体の約半分に達している。これは洪邁の指摘した所と一致してい

るようである。そして地方の府や州の知府・知州になって外に出たものも十人となっている。なおこの表を見ると、仁宗朝には三司使と翰林学士・知開封府・御史中丞との間に相互に任命されている例も多く、殊に前述の如く翰林学士で三司使となっているものや知開封府や御史中丞から三司使になっているものが多い。英宗朝には三司使は三人しかなかったが、その中一人が樞密副使となり、一人は知州となった。神宗朝になると、三司使十五人の中、三司使から直接に参知政事及び樞密副使となったものは三人しかなく、熙寧三年九月以後には直に執政になったものも見られない。これは權發遣三司使が多かったことによるものであろう。従って神宗朝になると、三司使は洪邁が指摘するような執政に進用される近路ではなくなった感がある。なお三司使から地方の知府・知州に出たものは七人あり、三司使十五人の中の約半分に当たっている。

これらの点から見ると、仁宗朝には三司使は執政に進用される近路であったようであるが、神宗朝になると、初期にはそのようであったけれども、後には必ずしも執政に進用される近路ではなくなったようである。これは新法が行われて、三司の財政を総括する權が縮小され、三司の重要性が低下してきて、遂に三司が廢止されるに至ったこととも関連があるものであろう。前述の如く神宗朝に權發遣三司使が多く任命されたことも、三司の財政權の縮小と関連があると思われる。

終りに前掲の二つの三司使の表を見て気が付くことは、三司使の任に久しくいたものもあるが、一般にはその任期が短いものが多いということである。このことは前述の「続資治通鑑長編」の仁宗・嘉祐七年(1062)五月丁未に、知諫院司馬光が上疏して、三司使・副使・判官は久任さすべきであると論じた中にも、

近歲三司使・副使・判官、大率用文辭之士為之、以為進用之資塗、不復問其習与不習於錢穀也、彼文辭之士、習錢穀者固有之矣、然不能專也、於是乎有以簿書為煩而不省、以錢穀為鄙而不問者矣、又居官者出入遷徙、有如郵舍、或未能尽識吏人之面、知職業之所主、已捨去矣、臣頃者判度支勾院、甫二年耳、上自三司使、下至檢法官、改易皆徧、甚者或更歷數人、雖有恪勤之人、夙夜尽心以治其職、人情稍通、綱紀粗立、則捨之而去、後來者意見各殊、則歸之所為、一皆廢壞、況怠惰之人、因循苟且、惟思便身、不顧公家者乎、如此而望太倉有紅腐之粟、水衡有實朽之錢、臣未知其期也、……………

と見えて、「この頃には三司使以下判官には文辭の士を用いて、進用の路としていて、錢穀を習っているかどうかを問わないで用いるので、文辭の士は簿書を煩わしいとし、錢穀を鄙しいとしてこれを省みないようになり、又これらの官に在るものが始終交替して、吏人の面を識らず、職業の主る所を知らない間にその職を去るので、これでは三司の財を豊かにすることはできない」といっている。そしてこの中では三司使陳恕が十余年の間三司を領したので、よく財賦を治したと述べている。⁽¹⁸⁾陳恕は前表に見えるように、太宗の淳化年間から真宗の咸平年間まで三司を領していた。又「統資治通鑑長編」^{卷一}仁宗・景祐元年(1034)五月、程琳を三司使としたときの同月丙寅の詔に、

自今三司使在職未久、毋得非次更易、於是(程)琳在三司、閱四年、遂得政、

とあるように、このとき已にこれから後には三司使はその職に久任させることとしていた。程琳は三司使となっていたこと四年であつたので、遂にその政を得て、大いに成績をあげた(前表参照)。然し三司使久任のことはその後も容易に行われなかつたようである。ただ三司使に久任しなくても成績をあげたものもいて、胡宿の「文恭集」^{卷三}鄭戩の墓誌銘によると、仁宗の康定元年(1040)三月、權三司使となつた鄭戩は転運使の考課格を復し、三司の錢の出入を句較して、羨錢四百万緡を得て、同年九月には同知樞密院事になつた。従つて鄭戩は三司使の任期としては半歳に過ぎなかつたが、成績は大いにあげた。更に「統資治通鑑長編」^{卷一}仁宗の嘉祐元年(1049)八月癸亥、知益州張方平を三司使とした条によると、「張方平は慶曆中に三司使であつたとき、京師に三年の糧とこれに倍する馬粟を蓄えさせたが、この頃には馬粟は僅かに一年に足り、糧は半減していた。そこで張方平は汴河漕運の十四策を上奏した。宰相富弼はこれを読んで、大いに感心し、これは国計の大本であるとして悉く施行させた。そして富弼は慶曆以来、張方平が食貨を論ずることは詳かで、朝廷は国計で損益する所があれば、必ず方平の奏議に本づいて施行したといっている。その後、期年にならずして京師には五年の蓄があるに至つた」と見えている。従つて張方平は前後二度三司使となつて、大いにその成績をあげたのである。

要するに北宋の三司使について見ると、国初には三司使は五代の制を踏襲して、武官を主にこれに任命していたが、真宗朝の中頃以後は全く文官だけを任命するに至つた。この三司使は宰相・執政につぐ要職であり、執政になる近路をなしていた。そのため任期の久しいものもあつたが、一般には短いものが多かった。従つて三司使として財政

の上で成績をあげたものは、そう多くはなかったようである。そしてこの三司使は神宗朝になると、その地位も低下し、遂に三司は廃止されるに至った。

三 三司の人吏と諸局吏の賽神会

宋では三司の各局即ち塩鉄・度支・戸部の三部と三部勾院・都磨勘司並に帳司・都憑由司・都理欠司・開拆司等の所謂子司には多くの人吏が置かれていた。又京師にある諸官司の各局にも人吏が置かれていて、これらの各局の人吏の間には、彼等の守護神である蒼頡を祀る賽神会が持たれていて、それら各局吏の団結が図られていた。そこでここではそれらのことについて述べる。

一 三司の人吏

宋初には三司には孔目・勾押・前行・後行等の人吏が多数いて、會計・書記等の事務を掌っていたようである。「統資治通鑑長編」^九卷一 太平興國三年(1078)十二月丙辰の条によると、

塩鉄・戸部・掌(度)支、三司所掌、凡二十四案、吏千余人、上慮使副判官督察、有所不及、而商稅・酒麴・末塩四案、最為繁劇、各置推官、……

とあって、三司の塩鉄・戸部・度支の三部には二十四案あって、吏が千余人もいて、三司使・副使・判官ではこれを督察することができないので、このとき始めて塩鉄の商稅案・(胄案)・末塩案・戸部の酒麴案には推官が置かれた。⁽¹⁹⁾しかもこれらの人吏には姦猾なものが多かったようである。「太宗実録」^三卷三 雍熙二年(985)四月辛巳の条によると、

詔諸郡、選胥吏之廉幹者、隸於三司、初上以三司積弊之淵藪也、旧吏姦猾、尤為難制、故於外郡選吏補之、優給糧祿、冀其畏法而自謹也、

とあるように、太宗は地方の州郡から胥吏の廉幹なものを選んで三司に属せした。これは三司が積弊の源であつて、従来の胥吏が姦猾で制し難いので、外郡から吏を選んで三司の吏に補して糧祿を優給して、従来の吏が法を畏れ

て自ら謹しむのを期待したからであつた。然し太宗は三司の吏の意見をもよく聴いてこれを施行させた。「統資治通鑑長編」七 太宗・至道元年（995）五月の条によると、太宗は三司孔目官李溥等二十七人を招きて、計司（三司）の錢穀の務を問うたので、李溥等はその利病を条奏せんことを願つた。太宗は三司使陳恕がこれらの孔目官李溥等の意見を徴しないことをいって、

凡財賦之通塞、繫於制置之臧否、見溥領李溥等略陳所見、亦各有所長、朕嘗謂陳恕等、若文章稽古、此輩固不可望卿、至於錢穀利病、此輩自幼即枕籍、寢處其中、必周知根本、卿等但仮以顔色、引令剖析、宜有所資益、恕等剛強終不肯降意詢問、

とあるように、孔目官李溥等は錢穀の利病については幼少のときから帳籍の中にいるので、必ずその根本を周知しているとして述べている。そして同月己未の条によると、李溥等は三司の利害七十一事を条上し、その中、四十四事が施行され、十九事は陳恕等をして議して後にこれを施行させた。そして李溥等は悉く武官の侍禁や殿直に補して、其の職を領させた。⁽²⁰⁾この中、李溥は河南の人で後述の如く東南六路発運使にまでなった。

真宗朝になると、これらの人吏の整理が行われた。「統資治通鑑長編」^{卷五}七 景德元年（1004）九月壬辰の条によると、真宗は三司の人吏の能否が雜混しているため、宮苑使劉承珪等を遣して、三司使・副使と共にこれを試験して、三部と諸司の人吏八百九十人を裁定して留め、その書計に精しくなく、又嘗って罪犯を負うたものは罷めさせた。然しこれらの人の祇役の久しきを思つて、皆三班や鎮（借）職に補任した。⁽²¹⁾これと同じ記事が「職官分紀」^{卷一}三司の三部諸司属吏にも見えており、これは詳しいので、これを掲げると、次の如くである。

国朝、景德元年九月、宮苑使劉承珪等言、奉詔与三司使、同選閱三部及諸司節級前後（行）、並裁定合留人数、三部并諸司、定留八百九十七人、

塩鉄百五十六人、度支百八十二人

戸部二百一十七人

三勾院百人、都磨勘司三十四人、都主轄支収司二十三人、拘収司四十人、都憑由司四十九人、都理欠司四十六人、開拆司五十人、

これによると、このとき宮苑使劉承珪等は三司使・副使と共に、塩鉄・度支・戸部の三部と勾院・都磨勘司等の諸司の節級即ち孔目・勾押官及び前行・後行（手分）を選び、八百九十人を留めた。その内訳は塩鉄百五十六人、度支百八十二人、戸部二百七十七人で、三部の合計は五百五十五人であり、三部勾院百人、都磨勘司三十四人及び都磨勘司附属の都主轄支取司二十三人や拘取司四十人、又都憑由司四十九人・都理欠司四十六人、開拆司五十人、これら諸司の合計は三百四十二人となっている。これらの諸司は三司の子司といわれるものであるが、これらの子司にも多くの人吏がいたのである。このように三司には人吏が多かったので、三司の官は久任すべきであるという論も出てきた。

「統資治通鑑長編」^{卷八} 真宗・大中祥符九年（1016）六月丙申の条によると、三司の各部に勾院を置いた処に、

上謂王旦等曰、人言三司官、不欲數易、蓋吏人幸其更移、不能尽究曹事之弊爾、

と見えて、仁宗は宰相王旦等によって「人の三司官が数々遷転すると吏人がその官の遷るのを幸とし、官はその曹事（諸案）の弊害を尽く究めることができないと論じたものがある」と述べている。これから三司の官は久任すべきであるという論がでてきたのである。更に同書^{卷九} 真宗の天禧二年（1018）十月癸卯の条によると、

三司使李士衡言、準詔歲省文帳二分已上、其在司主典、亦合裁減、詔今与三部衆官詳定、具合留名日以聞、既而取事簡人衆者、出補三班、

とあるように、三司使李士衡はいつて、詔に準じて、歳毎に三司の文帳二分以上を省いたので、三司でそれを主っている吏もまた減らすべきであるといったので、真宗は詔して、人吏の留むべきものを上聞させ、三司で事務が簡にして人の衆いものは出して三班に補任させた。従ってこのときにも三司の人吏の人員整理が行われたのである。

仁宗朝の初めにも「統資治通鑑長編」^{卷一} 景祐元年（1034）五月辛未の詔に、

三司吏有能上錢穀利害可施行者、当非次遷補之、

とあるように、太宗のときの如く、三司の人吏でよく錢穀の利害の施行すべきをいうものは、臨時に遷補することとした。又この頃に人吏の整理をも行おうとした。然しこのときには人吏が激しく反対した。即ち同書^{卷一} 景祐三年二月乙卯の条によると、

先是上以三司胥吏猥多、或老疾不知書計、詔御史丞杜衍・入内押班岑守素与本司差扱之、

去年九月己酉已而三司後行朱

正・周貴・李蓬吉等數百人、輒相率詣宰相呂夷簡第喧訴、夷簡拒不見、又詣王曾第、曾以美言論之、因使列狀自陳、又詣衍第、投瓦礫、且言因衍上言、致朝廷議欲揀汰、又各持料錢曆、欲自毀裂、肆醜言乃去、明日衍對請下有司推究、而曾具得其姓名、乙卯、正・貴杖背、配沙門島、蓬吉等二十二人、決配遠惠州軍牢城、其為從者皆勒停、

と見えて、景祐二年九月には三司の胥吏即ち人吏が頗る多くてその中には老疾で書計を知らないものもあったため、御史中丞杜衍・入内押班岑守素に詔して、三司と共にこれを選ばせた。そこで翌景祐三年二月乙卯になって、三司の後行朱正・周貴・李蓬吉等數百人は相率いて、宰相呂夷簡・王曾や杜衍の第宅に押しかけて、朝廷が人吏を揀汰するのに反対し、各人は料錢曆を持って自ら毀裂して反対の語を述べた。そのためこの日朱正・周貴は沙門島に流され、李蓬吉等二十二人も遠惠州郡に配流されて牢城軍とされ、これに従ったものは皆その職を勒停された。このようにこのとき三司の人吏數百人がその人員の整理に反対して騷擾を起したが、これは後述の如くこの頃已に京師にある諸司の各局の人吏の間には團結ができていて、かれらがそれによって共同の利益を守っていたことも関連があるものであろう。然し政府はこれらの胥吏の騷擾を権力でもって抑圧すると共に、已定の方針の通りに整理を断行した。即ち同書の同じ条の景祐三年三月丙戌の条によると、三司揀試所がその定めた所の諸案の吏の功過を上ったので、能く錢穀の利害を知るものは次をもって遷補し、贓罪を再犯するものは勒停させたのである。

このように仁宗朝には三司の人吏の贓罪を犯すものは、これを罷めさせていたが、人吏の賄賂を取ることは一般に行われていた。趙抃の「趙清獻公集」^三卷三、奏狀の乞移司勘結三司人吏犯贓及び乞移勘丘岳李先受贓等事によると、嘉祐元年（1056）の頃、三司副使李參が手分（前行・後行を指す）丘岳・李先等の法を枉げて財物を受取って、官錢を支出して客人に与えたのを發摘したので、開封府をして勘鞫させたが、三司や開封府の官員は公を尽くして根勘せず、開封府の軍巡院も賄賂を得てこの罪人を放ったので、別に官を遣し又は御史台下して勘鞫させんことを論じている。趙抃はこの文の中で、

伏緣方今財用匱乏、日益不易、三司掌天下利柄、人吏公然作過、上下蒙昧、隱盜官物、其因事發覺者、百無一二、

と述べて、三司の人吏は公然賄賂を取って、官物を隠盗しているが、その発覚したものは百に一、二もないといっている。従って仁宗朝には三司の人吏は多く賄賂を取り、官物を隠盗していたのである。

神宗朝になると、熙寧三年（1070）八月から倉法が行われて、諸倉の人吏に禄を支給することとした。これは諸倉の吏が在京の諸軍の月糧を多く欺盗取したためであって、倉法を行って吏に禄を支給する代りに、これらの吏が諸倉や糧綱の錢物を乞取するのを禁止したものである。²³三司の人吏も前述の如く賄賂を取っていたので、この倉法が適用された。更に当時三司の吏が賄賂を多く取っていたことについては、蘇轍の「欒城集」^九卷三 論戸部乞取諸路帳狀の中で、熙寧五年、曾布が三司に提挙帳勾磨勘司（帳司）を置いて天下の帳籍を磨勘させたことを論じた処にも、

熙寧以前、天下財賦文帳、皆以時上於三司、至熙寧五年、朝廷患其繁冗、始命曾布刪定法式、布因上言、三部胥吏、所行職事非一、不得專意点磨文帳、近歲因循、不復省閱、乞於三司選吏二百人、顓置一司、委以驅磨、是時朝廷因布之言、於三司取天下所上帳籍視之、至有到省三十年不發其封者、蓋州郡所發文帳、隨帳皆有賄賂、各有常數、常數已足者、皆不發封、一有不足、即百端問難、要足而後已、朝廷以布言為信、帳司之興始於此、帳設官吏、費用錢物、至元豐三年首尾七八年間、帳司所管吏、僅六百人、用錢三十九萬貫、而所磨出失陷錢止一万余貫、朝廷知其無益、遂罷帳司、而使州郡應申省帳、皆申轉運司……

と見えている。即ち熙寧年間以前には天下の財賦の文帳は三司に上らしめていたが、これらの帳籍には賄賂の額が一定して、賄賂の額が納められれば、それら帳籍を検査しないが、賄賂が足らないと、これに文句を附て賄賂の額を受取っていた。そのためこれらの帳籍は二三十年の間もその封を開かないで置かれていた。そこで熙寧五年、曾布の請に従って、吏二百人を選んで帳司（提挙帳勾磨勘司）を置いて、これを驅磨させた。然し元豐三年までこれを行ったが、帳司の所管の吏六百人で錢三十九萬貫を費して、失陷錢を磨出したのはただ一万余貫であつたので、遂に帳司を罷めたといわれている。従って三司の人吏は神宗の熙寧年間以前には天下の帳籍について、それらの帳籍の賄賂の額を定めていたのである。そこでこれらの賄賂を罷めさせるために、三司の吏に禄を支給することとした。これについては「統資治通鑑長編」^{卷二}熙寧六年正月己酉の条に、

王安石請增三司吏祿、上批增祿費多所減、吏又未可遽減、令安石再相度、安石言、祿不可不增、又言不患乏錢

之理、安石以為初市易行、倉法用万八千緡、以故收市例錢九万緡、方以次修法、市例所收、未有紀極、而因併綱運、減省上供所有牙前酬獎、止京東及成都兩路、歲收已一百万緡、即吏祿不患少可知、上從其請、……

とあるように、王安石は三司の吏の祿を増すべきことを請い、それらの財源は市易法による市例錢の收入と綱運を因併して、牙前が上供するための酬獎を減省した費用を充てれば、少きを患えないといったため、神宗もこれに従って施行させた。同書^{卷二}四八、熙寧六年十二月壬申の条によると、

時内自政府百司、外及監司諸州、胥吏皆賦以祿、謂之倉法、京師歲增吏祿四十一万三千四百余緡、監司諸州六十八万九千八百余緡、然皆取足於坊場河渡・市例・免行役剩息錢等、……

とあって、京諸司から監司・諸州の人吏に皆祿を与えて倉法といい、京師では歲毎に吏祿四十一万三千四百余緡を増したとあり、それらは坊場・河渡・市例・免行・免役錢の息錢等で賄っていたようである。京師の諸司では三司に特に胥吏が多かったから吏祿が増されたものであろう。前述の「欒城集」の論戸部乞取諸路帳狀の中には、三司の中の帳司が初めは吏二百人を用い、後には吏六百人を管轄して、錢三十九万貫を用いたとあるが、この錢も熙寧六年に三司の吏の祿を増したためであつたであらう。

次に三司の人吏は年数によつて官に陞進されたようである。これについては「宋史」^{卷一}二二職官志の叙遷之制の流外出官法の三司の条によると、

三部都孔目官、三年出西頭供奉官、前後行、入仕三十年已上、遇大札、從上各出二人、前行出奉職、後行出借職、子司勾覆、開抹官、五年出左右班殿直、前後行二人、同三部、

とあって、塩鉄・度支・戸部の都孔目官は三年にして、武官の西頭供奉官となつた。前行・後行では入仕三十年已上のは、大札に遇うと、上から各二人を出して、前行は三班奉職に出で、後行は三班借職に出でさせ、又三司の子司である勾院の勾覆や開抹官は五年にして左右班殿直に出で、前行・後行は三部の場合と同様にして、三班奉職・三班借職に出でさせた。三司の人吏の中にも高官に陞つたものがあつた。「宋史」^{卷二}九二李溥伝によると、前述の如く李溥は太宗末年に三司の利害を上奏して、その多くが実施されたため、拔擢されて左侍禁・提点三司孔目官となつた。その後開門祇候・提拳在京倉草場・勾当北作坊となり、崇儀使に遷り、發運副使・使で西京作坊使となり、東南の米穀の漕

運に功を立てて、凝州団練使を授けられている。その他「統資治通鑑長編」^{卷一}仁宗・慶曆元年（1041）十二月癸巳の条によると、同提点河東刑獄供備庫副使陳鼎はもと三司から出職即ち三班に出でたものであったが、このとき江南東路の同提点刑獄に遷され、翌慶曆二年二月丁丑には益州都監兼知利州となっている。これも三司の人吏から出て、提点刑獄・知州となったものである。又三司の吏で永年の間勤務したため、官を与えられたものも見える。歐陽脩の「歐陽文忠公文集」^{卷八}外制によると、三司前行胡敏は永く勤めて病のため罷めたので、許州長史となり、鄭獬の「隕溪集」^{卷五}外制によると、三司の後行孫有慶も病のため罷めたので、曹州司馬となった。王安石の「臨川集」^{卷五}外制によると、三司開拆司の守闕前行滑州別駕王亨は年老いたため、鄭州司馬とした。このように三司の人吏は罷めるときに、諸州の長史・司馬等の官を与えられたこともあった。

要するに三司には多くの人吏がおり、これらは賄賂を取り、官物を隠盗していた。そこでこれらの人員を整理することが行われたが、後には人吏は団結してこれに激しく反対した。彼等は年少のときから三司に勤めて、書記・会計等の事務に熟達していたので、太宗のように錢穀の利病を上聞させて、これを実施させたこともあった。神宗朝には人吏に禄を増給して、彼等が賄賂を取るのをやめさせようとした。これらの人吏はその年功によって武官に陞されており、その中には高官に陞ったものもいた。

二 京諸司の局吏の賽神会

北宋では京師の諸司の人吏は毎年会して神即ち守護神を祀っていたようである。「永樂大典」^{卷二九}神の釀錢賽神によると、「燕語考異」を引用して、

京師百司胥吏、每至秋、必釀錢為賽神会、往往因劇飲終日、蘇子美、進奏院会、正坐此、余曾問其何神、曰蒼王、蓋以蒼頡造字、故胥吏祖之、固可笑矣、官局正門裏、皆於中間、用小木龕供仏、曰不動尊仏、雖禁中諸司皆然、其意亦本吏畏罷斥、以為禍福甚驗、事之極恭、此不惟流俗之謬可笑也、雖神仏亦可笑也、子美云、且留邸之祀神、縁常歲而為会、餽余共享、京局皆然、竊謂前規有所未便、起無名之率、会不肖之徒、且釀斂吏人、豈如斥壳棄物、嘯聚非類、豈如宴集同僚、蓋子美乃不欲釀錢、而奏用市故紙錢会客也、

と見えている。この記事の中で蘇子美即ち蘇舜欽が進奏院の賽神会で故紙を売って客を会して罰せられたことは、

「続資治通鑑長編」^{卷一}仁宗の慶曆四年(1044)十一月甲子の条に記されている。従つてこの中に見える事實は北宋の仁宗朝の頃のことである。これによると、この頃には京師(開封府)の百司の胥吏即ち人吏は秋になると、必ず錢を醸出して、賽神会即ち神を祀る会を行つて終日飲酒していた。その神は中国の古代に文字を造つたといわれる蒼頡であつて、胥吏はこれを祖先としていたためであつた。又胥吏は京師の諸司の局の正門裏に小さな木籠を用いて、不動尊仏をも拝していた。これらは胥吏がその任を罷斥されるのを畏れ、その禍福の靈驗があらたかであるとして、これらの神仏に事えて極めて恭しかったものである。そして蘇子美の言の中には「京局ではみな歳毎に吏人が賽神会を行つていた」といわれている。蘇舜欽がこの賽神会で罪に処せられたことについては、前述の長編の慶曆四年十一月甲子の条によると、宰相杜衍、執政范仲淹・富弼等は御史中丞王拱辰等と意見を異にしていたが、このとき杜衍の壻であつた監進奏院蘇舜欽等が、この祠神の会で故紙を売つた公用錢でもつて妓女を招き、席を開いて館閣の史館檢討王洙・集賢校理江休復・王益柔等多くの人々を会していたので、王拱辰は御史魚周詢等に諷して、一挙に網尽して、これらの人々を弾劾させたため、蘇舜欽は自盜律に坐して、除名して湖州に竄せられ、王洙等はみな職を落された。このことについては蘇舜欽も、前掲の「燕語考異」に見えるように、「蘇學士文集」^{卷九}上集賢文相(文彦博)書の中で、これを弁明している。それによると、「御史府が杜少師(衍)・范南陽(仲淹)と隙あり、遂に大獄を起して自分を罪に陥れた」といい、

此会(賽神)以常年醸率吏人、燕集非類、某思之以為非便、遂与同監院劉巽、出俸錢十緡、又於尋常公用売故紙錢四五十索相兼使用、此錢本由斥売棄物、兩曾奏聞、本院自來支使不係諸処帳籍、如外郡貨売雜物以充公用之類也、既以与祀神之物、与館閣同舍・本局群吏、飲食共費之、推按甚明、具獄備在、無一物入己、而以監主自盜、減死一等定刑、……

と述べて、「この吏人の賽神会では毎年吏人から錢を醸出させて、胥吏が燕集していたが、自分はこれはよくないとして、同監院劉巽と共に俸錢を出し、尋常の公用錢の中から故紙を売つた錢を出して兼ねて使用した。この錢は棄物を売つたものであり、進奏院がこれまで支出していたもので諸処の帳籍に係らないものである。自分はこれらの祀神に与える物でもつて、館閣の人々と共に、本局の群吏と集つて、飲食して共にこれを費消したが、一物も自分には入

れてはいなかった。然るに監主の自盜律に坐せしめられた」と述べている。これによると、在京各司の人吏は局毎に集まって、秋に賽神会を行っていたようである。このことについては神宗朝の僧文瑩の「湘山野錄」下にも次のように見えている。

蘇子美、以奏邸旧有賽神之会、局吏皆鬻積架旧物、以置肴具、歲以為常、惟子美作之、言者因席人以進制獄鍛鍊、皆一時之名賢、獄既就黜、台館為之一空、子美坐自盜律、削籍竄湖州、

奏邸即ち進奏院では賽神会があつて、局吏が皆架に積んである旧物を売って肴具を置き、毎年これを行っていた。ただこのとき蘇舜欽がこれを行い、館閣の名賢を会したため、御史のために弾劾され、獄が蹴って、館閣の士は落職し、舜欽は自盜律でもって重く罰せられたといわれている。

以上のように北宋の中期には在京の百司では毎年秋に胥吏が錢を醸出し、或は積架の旧物を売って、肴具を設けて、守護神の蒼頡を祭る賽神会を行い、各局吏は親睦を図り、共同の利益を守っていた。この資料は進奏院の胥吏の賽神会について述べたものであるが、その中には「京局皆然り」とあるから、三司の胥吏も同様であつて、これらの胥吏も賽神会を行つて、その親睦を図り、共同の利益を守っていたものであろう。前述の仁宗・景祐三年二月、政府が三司の胥吏の人員整理を断行しようとしたとき、三司の胥吏が激しい抵抗をしたのも、このような團結があつたためであらう。なおこのようにこの頃在京各司の胥吏が賽神会を行つて、親睦を図り、共通の利益を守っていたことは、当時の商人組合の行と同様であるとも考えられるが、商人の行は都市の同業者を広く集めていたから、この場合は行とは多少異っているようにも思われる。即ちこの資料では各局毎に人吏が集まって賽神会を行っていたようで、百司の胥吏が皆集つてきて、賽神会を行つてはいないようである。この点から見て、このとき在京百司の胥吏が行を組織していたかどうかについては多少疑問がある。

然し元代になると、地方の州県では胥吏が商人の行のような組織をもっていた。「兩浙金石志」^{卷一}「元の延祐元年（1344）の長興州修建東獄行宮碑（孟淳撰）」によると、碑陰には東獄行宮を重修又は重建した施主の名があげられており、その中に多くの行名と共にこの胥吏の行名も見えている。そこでそれをあげると、

子孫司、五熟行、因元貴・徐富・周敬、

北宋の三司の性格（周藤）

都城隍司、香燭行、宋文政・銭思誠・郷文貴、……

竜王司、銀行、吳永祥・楊新、

速応司、玉塵行、陳榮・周二秀・倪成、……

水府司、篙師行、俞慶・沈林・周慶、……

照証司、淨髮行、姚珍・桑琇・費榮、……

積財司、裁縫行、陳元・金贊・營琳、……

放生司、錦鱗行、楊富・包源・費政、

齋僧司、糖餅行、陸進・陳良・朱文彬、……

曹職司、曹行、錢旺・唐桂・徐勝・談成等、

とあって、これらは重修したものであり、これらの諸行の中には、曹行即ち曹司（州の人吏）⁽²⁴⁾の行があり、それが曹職司を重修している。更にここには重建したものもあげられており、その中に次のようなものも見えている。

忠靖王殿 本州司吏・貼書

執政司 雙線行、吳嚴・馬元・費椿、……

功德司 果行、張宣・因貴・王応森、……

注福司 綵帛行、金潤・張君垢・王涇、……

掌命司 厨行、趙興祖・湯勝・蔡燁、……

掠剽司 飯食行、俞厚・十良・沈敬

これによっても忠靖王殿は本州即ち長興州（宋湖州長興縣）の司吏・貼書等の人吏によって重建された。このように長興州では胥吏の曹行が見え、又司吏・貼書が共同して、東嶽行宮の忠靖王殿を重建していたのである。

以上のように宋代には中央の諸司の諸局では人吏は毎年秋に賽神会を行って、守護神の蒼顔を祭る会を行い、その親睦を図って団結を行い、その共同の利益を守っていた。従ってこれは三司の人吏の間でも行われていたものであろう。元代になると、地方の諸州県の人吏の間には曹行というような組合ができていて、相互の利益を図っていたよう

である。

四 衙司の大將・軍將

北宋の三司には衙司に大將・軍將が属して、漕運・駱駝の放牧・河川工事・工匠教育・左右廂店宅務の事務、酒坊経営・内蔵庫の管理等を行っていた。「職官分紀」^三卷一「三司の開拆司の条によると、衙司は軍將・大將の差遣を掌っていて、開拆司主判官が兼領し、内衙司は諸司使或は内臣一員でもって同じく勾当させていた。「宋史」の三司の衙司では、これは大將・軍將の名籍を掌り、其の勞を等級付けて、其の役使を均しくさせていた。又宋会要・職官の三司・衙司の熙寧七年(1074)三月九日の詔によると、このとき三司大將・軍將の額は千五百人と定められ、その外に守闕軍將が募充された。従って三司の衙司には多数の大將・軍將が置かれていた。

これらの大將・軍將は漕運に多く従っていたようである。宋会要・食貨・漕運の太平興國八年(983)九月十三日の条によると、太宗はいつて、「諸道の州府では多く部内の物力ある人戸を軍將(衙前軍將)に充てて、錢帛・糧斛を部押して京師に赴かせているが、篙工・水手・牽駕の兵士は皆頑惡無籍の輩であり、官物を侵盜して、恣に不法をなすものが十に七八であって、それらの欠折は綱を主るもの(衙前)がこれを填納して破産する」となし、詔して、今後荊湖諸州の綱船は三司をしてその人数を度り、江淮の例によつて軍將・大將を差して管押させ、江淮兩浙の諸州も一に前詔に依つて、大戸(物力ある戸)を差して綱運を管押させないようにさせた。即ち太宗は江淮・兩浙・荊湖の諸州では郷村の物力ある戸を衙前に充てて漕運を行わせると、篙工・水手等が官物を侵盜するため、衙前が破産するので三司の軍將・大將をして綱運を管押させたのである。²⁶又同条の真宗・景德二年(1005)十月の詔によると、「黄河の綱運では三司をしてこれより後、一年般運して疏失のないときには、その部轄した殿侍や三司軍大將・綱官・綱副には毎月緡銭を増給させる」とした。²⁷この中、殿侍は前述の三班借職等の下の武官であり、又三司大將・軍將はその下であつて、三司に属していた。更に同条の天禧二年(1018)二月の詔によると、御河(永濟渠)押運の三司大將・軍將・殿侍並に見在御河押運の人員は、元定めた二十万の物色の上に、五万を増して、二十五万として、もし三年で満

ちて得替するとき、この数を装般すれば、例によって引見して酬奨させることとした。又同年九月十八日の詔によると、三班使臣で益州（成都）の綱運を部送して、荆南（江陵府）に至って遺闕のないものは、毎運錢十五貫を賜い、三司軍將・大將のときには十貫を支給することとした。⁽²⁸⁾

更に宋会要の同じ条の天聖三年（1025）十月二十七日によると、舒州（安徽省懷寧縣）がいつて、「皖口都塩倉では白米殿侍・三司軍將を遣して、綱船を管押して下卸させ、舒州ではただ里正・軍將を遣してこの倉に交納させており、一界毎に塩百余万斤である。乾興元年（1023）以前には累界支売して漏底し、例として皆欠折錢一・二千貫あったが、これは押運人員が郷民を欺き、里正が生疎であったため、多く塩貨を侵偷貨売され、雜物を拌和され、秤勢を傾圧されて、斤兩が不足し、都塩倉に交納した後、漸次塩が銷折したためであった。そこで天聖元年より後には舒州の衙前職員である都知兵馬使・都押衙以下通引官以上と里正・軍將の新人とを相兼ねて、交納のことを勾当させたので、斤兩も足り、拌和の弊もなく、各界の塩倉の支賞も済んで出刺もあり、売塩の課利も三五倍になった」と見えている。これは三司の軍將が塩綱を管押していたものである。同じ条の天聖五年八月には江淮發運司がいつて、「汴河の糧綱を管押する殿侍・軍大將は条例に准ずると、四百料から五百料の綱船を押すので、今後は楚州から四運して三万六千石以上を京師に卸納し、泗州からは五運して四万二千石以上を京師に卸納し及び冬の短般を経て年終に至って抛失・欠少がないときには、条によって酬奨することとする。近年諸綱は才かに一兩運に及んだとき、各処の排岸司で求めて別綱の舟船を借撥して、船運の数を増して酬奨を僥求しているので、これを禁止せん」と請うている。これは軍將・大將が汴河の糧綱を管押していたものである。更に同六年十月には三門白波發運使盧隨がいつて、「点檢するに、本司の塩糧綱船を押する殿侍・軍大將は、舟船を抛失したとき、時に臨んで諸処で疾患の状を申報して、科罰を免れんことを求めるので、これから後にはもし舟船を抛失すれば、その殿侍・軍大將はたとい疾患状を申報しても、抛失の罪を免れないようにせん」と請うた。これは三司軍大將が黄河の塩糧綱を管押したものである。又同条の天聖八年正月、三司がいつて「編済河都大催遣策運任中師が奏して、今後本河でも毎年各綱で地理を約定して、般する所の糧斛数目を量って酬賞を与えんといった。そこで三司の編敕を檢会すると、これでは運河の押綱使臣・人員等が一年の全綱で般する所の斛斗が万数になると、漕運をやめたとき、發運司をして磨勘させて、稍工・綱官には錢を賞給し、管

押人は三司が労績を具奏し、軍將は大將に転じ、使臣・大將は引見して酬賞している。又編敕では、押運の省員・殿侍・三班借職等には、每人印紙（成績簿）五十張を支給して、曆子に充てて収掌させ、官物を送納したときには、その欠少の有無・程限の違否・舟船の抛失・雑犯の潛罪に拠って、催綱や装卸の排岸司において曆子に批書させ、年満ちて得替するとき、省（三司）に赴いて投納して、比較して磨勘させている。そこで広済河の押糧軍大將・殿侍もこの編敕に依って、三年内に般運した斛斗で少欠なければ、量って酬賞を与えん。広済河の稍工・綱官も一年の内地地理と運数を定めて、少欠や犯罪がなければ、錢を賞給し又は転資させん」と請うている。これは広済河でも三司の軍將・大將が糧綱を管押していたことを証するものである。このように三司の軍將・大將は江南・四川・御河・黄河・広済河等の糧綱や塩綱を管押していた。

又同じ宋会要の漕運の条によると、天聖元年七月、三司がいつて「陝西路転運司が奏して、管下の四路の州軍では大いに軍馬を屯して、毎年軍須の物色を支撥すること万数であって、各州軍では衙前を一年に二度も差遣しているの、在京駱務から駱駝二百頭を差撥し、殿侍或は三司の軍將・大將四人を遣して、每人駱駝五十頭に分て、近い草地で放牧して用に供し、民を撓めないように請うた。そこで三司では河東路石州で放牧している駱駝百頭を陝西に遣して、華州華陰界泉店で牧放させ、その軍將・大將は三司から差応させん」と請うている。これによると、三司の軍將・大將は駱駝の牧放のことも管理していたようである。三司の度支には騎案があつて、牛羊馬等の放牧を掌っていたので、このような軍大將もいたのであろう。⁽²⁹⁾又「統資治通鑑長編」^{卷三}元豐二年（1079）九月丁卯の条によると、洛水を導いて汴に入れ、隄を築いて河を捍ぐ功が畢ったので、これを実施した知都水監范子淵・同判都水監宋用臣等を陞進させた。その中に

三司軍大將等、遷両資者五十六人、遷一資者八十一人、

と見えていて、このとき三司の軍將・大將等はこの工事を監督していた。従つて三司の軍將・大將の中には都水監の管下に入つて、河川工事の監督を行つていたものもあつたようである。都水監はもと三司の塩鉄の胄案の中から独立した河渠司が改められてこの都水監となつたものであるから、⁽³⁰⁾これにも三司の軍將・大將が属していたものであろう。更に同書^{卷二}熙寧六年十二月壬辰の条によると、

軍器監言。弓匠李文応、箭匠王成、伎皆精巧、詔補三司守闕軍將、以教工匠、

とあるように、軍器監が弓匠李文応・箭匠王成がその技術が精巧であるといったので、三司の守闕軍將に補して、工匠を教えさせた。この軍器監も三司の胄案を改めたものであるから、その工匠が三司の守闕軍將に補せられたものである。

更に宋会要・食貨・左右廂店宅務によると、真宗的大中祥符六年(1013)六月の条には

詔店宅務、自今選差京朝官・使臣各二員、曾歷知縣監押以上者、分左右廂勾當、二年一替、立界交割、具見實・見閑・款墊・倒塌四等及課利數、……又於三司、選詣錢穀有行止軍大將、充專知勾當、算造一界帳磨勘、無遺闕、与第一等優輕差使、又選三司親事官五十人掠錢、一年一替、人給印曆、開坐地分舍屋間稼地段錢數、分月掠日掠數、立限送納、

とあるように、左右廂店宅務では京朝官・使臣各二人を選差して、監官に充てて、左右廂の官有の店宅を管轄させ、又三司から錢穀に明かるくて行止ある軍將・大將を選んで、專知に充てて、一界(二年)の帳を造ってその成績を磨勘させ、遺欠がなければ、後述のような第一等の優輕差使を与え、更に三司の親事官五十人を選んで家賃を徴収させた。従って左右廂店宅務には錢穀に明るい三司軍將・大將が遣わされて、專知官となり、その錢穀の帳簿を掌っていた。更に同じ条の天聖四年(1028)閏五月の勾當店宅務朱昌符等の言によると、右廂の倒塌舍屋及び左右廂の折修・薦拔・瓶修の舍屋は、八作司の例によって、三司軍將・大將を遣し、各廂に三五人として、その間数を分定して材植を主管し、三年を一界として、差替して帰省させ、界内に官物の失陥がなければ、後述の優輕な差遣を与えることとした。従って三司軍將・大將は左右廂店宅務の店宅の修築工事をも掌っていた。

又「統資治通鑑長編」^{卷三十三}神宗・熙寧五年(1072)五月丁酉の戸部判官呂嘉問の言によると、

畿内酒坊等处、連三竈、歲省柴四十余万斤、推之府界、陳留一県、省三十二万斤、約諸州、歲省柴錢十六万緡、先獻連二竈法三司軍將王靖、爰連三竈法號州民常震並乞加賞、

と見えて、このとき畿内の酒坊で、「三竈を連ねる法」を用いて、歲に醸造用の柴四十万斤を省くことができ、諸州で歲に柴錢十六万緡を省くので、前に「二竈を連ねる法」を獻じた三司軍將王靖と「三竈を連ねる法」に変えた韓州

の民常震を賞せんことを請うた。そこで王靖は大将に遷り、常震も試国子四門助教とした。これによると王靖は酒坊のことも行っていたようである。

更に同書^{卷六}景德三年（1006）十月丁酉に内殿崇班謝德権を提轄三司衙司とした条には、

德権設条制、均其差使、有大將^{主藏}、内侍為奏留、規免煩重之役、德権携奏白上、極言其僥倖、と見えて、内臣謝德権は衙司を提轄し、条制を設けて、三司の軍將・大将の差使を均しくしたが、大将で内侍に属して、主藏即ち内藏庫を主るものがあり、内侍がこれを留めて、煩重な役を免れさせようとしたので、謝德権は真宗にその僥倖を極言したようである。従って三司の大将の中には宮中の倉庫を掌っていたものもあった。

以上のように三司に属する三司軍將・大将は、漕運・駱駝の放牧・河川工事の監督・軍器工匠の教育・店宅務の事務・酒坊の燃料・宮中の倉庫等色々なことに差使されていた。「宋史」職官志・三司の衙司によると、前述の如く衙司は大将軍將の名籍を掌り、其の勞を第し即ち等級付けて、その役使を均しくするものとされている。このことについて宋会要・職官・三司の衙司の条には、次のような景德三年九月の詔が見えている。

三司^{三司}底差大将・軍將、短次勾当、仰衙司出給印紙三十張、抄上所差勾当事名目、隨公事緊慢起發、仍不得過限五日、候於印紙上批書差撥月日、取本判官押書、逐程往廻、並依此批書、如在路有阻滯去處、亦取隨處州縣官司批書因依、候到京、亦不得過限五日、須赴衙司公參、委本司点檢磨勘程限違否所差、將曆子批鑿架閣、所差陸路管押官物、自來密院出給駅券、水路省司出給曆頭、逐日支破食錢、如不管押官物、亦自省司給与倉券、若差押船綱、有過犯該条、以替歸省者、但省司開坐犯罪因由、斷造刑名、帖送衙門、委本司置簿簿錄省帖、不以元定年限押運滿与不滿、仰勘会、如元係第一等優輕者、先与三次短差、後却与一次第一等重難、係第二等優輕者、即与兩次短差、後却与一次第二等重難、元係重難綱運、並却与一次第一等重難差遣、

これによると、「三司の大将・軍將が短次に事務を行うときには、衙司は印紙（功罪を記入する帳）三十帳を支給して、その差使の事務を記して起發させて、その月日を記入し、その差使を終って回ったときにもこれを記入させる。路で阻滯したときにはその理由を記入させる。そして衙司をしてその程限の違否とその差使する所を点検して磨勘し、その曆子（印紙を）を批鑿して架閣しておく。その差使する所が陸路で官物を管押するときには、樞密院が駅券を給し、水路の

ときには三司が厩頭を出給し、毎日食錢を支給する。もし官物を管押しないときには三司が倉券を支給する。もし綱船を差押して犯罪があり、替って帰ったものは、三司がその因由と刑名を記して、その衙門に帖送する。そしてその差使が元第一等優輕に係るものは、三次短差を与えて後に、一次の第一等の重難の差遣を与える。第二等優輕に係るものは、兩次短差を与えて、後に一次の第二等の重難を与える。元重難綱運に係るものは並に一次の第一等重難差遣を与える」こととした。従って三司の大將・軍將が短次の事務（短差）を行ったときは、印紙を支給して、その成績を記入させた。又大將・軍將が陸路で官物を管押したときには、厩頭を支給して食錢を支給し、官物を管押しないときには、倉券を給与していた。そして大將・軍將は水陸路で官物を管押したが、官物を管押しないこともあった。更に大將・軍將の差使は公平になるようにされており、もと第一等の優輕な差使であつたものは、三次の短差があつて後に、一次の重難な差遣を与えられ、第二等の優輕な差使に充てられたものは、二次の短差の後に第二等の重難な差使を与えられ、もと重難な綱運に充てられたものは、短差がなくて、一次の第一等の重難な差遣を与えられた。この中、優輕は差使の輕くて容易なもので、第一等優輕は最も輕くて容易なものであり、重難な差使は重くて苦しいもので、第一等重難は最も重くて苦しいものであつた。これを綱運についていうと、宋会要・漕運の元祐六年（1091）四月二十一日の刑部の言に、

御河粮綱、初係六十分重難差遣、其後以河道平穩、改作六十分優輕、今因小異決口、注為黃河、水勢險惡、乞復為重難、

とあるように、前述の御河の粮綱はもと六十分の重難⁽³²⁾な差遣であつたが、その後に河道が平穩になったため、六十分の優輕な差遣となり、この頃小異で決口して注いで黃河となり、水勢が險惡となったので、復た重難な差遣となった。従つて河道が平穩なときには、その漕運は優輕であり、河道が險惡となれば、それは重難となった。更に前述の左右廂店宅務の差使についていうと、前述のように宋会要の左右廂店宅務の真宗・大中祥符元年六月の詔では、店宅務には監官を置き、軍將・大將を專知に充てて、その錢穀帳を管理させ、一界（二年）で遺欠がなければ、第一等優輕差使を与えることとした。更に同条の仁宗・天聖四年二月、入内押班江德明が左右廂店宅務の課利の旧額を欠少していることを述べた処には、

又詳、本務係第一等重難、三司差軍大將充專副、二年界満得替、並無破帖憑由、亦無界末文帳、是致難以点檢、今後差軍大將立界、候二年界満、起置交頭交割、供申界末帳、赴三司、候勾磨了日、別与優輕差遣、と見えて、店宅務において三司の軍將・大將にして差せられて專副に充てられているものは、第一等重難な差遣であり、二年の界が満ちて得替するとき界末帳を点檢し磨勘して、優輕差遣を与えることとした。従つてこの左右廂店宅務は第一等重難な差遣であるため、遺欠がないときには第一等優輕差遣を与えることとしていたようである。これらから見ると、三司の衙司は軍將・大將の差遣には優輕と重難な差遣及び短差を組合せて、その差遣を均しくし、公平を期していたようである。従つて前述のように、景德三年十月、提轄三司衙司謝德權はこの三司大將・軍將の役を均しくし、内侍が内藏庫を主る大將を留めて、煩重（重難）の役を免れさせようとしたのを僥倖を求めるものであると非難したのである。これから見ると、内藏庫を主るのは優輕差遣であつたようである。

次に三司大將・軍將の出身と出職について述べると、宋会要・職官・三司の衙司の条の大中祥符二年（1039）十一月の詔では今後三司大將・軍將の中、もと使臣（三班使臣）で恩赦に該当して叙理し、更に一次差遣を与えているものは、軍頭引見司が旨を取つて、一年或は二年・三年の差遣を与えて、その劄子の中でこれら使臣は三司に送つたと書いておき、年限が満ちた日に、例に依つて磨勘引見させる」こととした。これらの三司軍將・大將は禁兵の御前忠佐軍頭引見司から三司に來たものであつた。これについては同じ条の大中祥符八年十二月の崇儀使管轄三司大將軍將秦儀等の言にも、

欲乞自今每有叙理使臣、降充三司軍大將、候到司收管、即行公文会問刑部、取本人元犯及斷遣刑名、子細抄録、牒報衙司置簿拘管、如經恩赦、合再該叙理、三司更不會問刑部、只於衙門取索照会、

とあつて、叙理使臣を降して、三司軍將・大將に充てたものは、刑部に問うてその犯罪及びその刑名を録して、衙司の簿に記入させ、恩赦に遇えば、これを取索して照会させることとした。これによると、三司の衙司には三班使臣で罪を犯して、三司軍將・大將に充てられたものもいた。その中には前述のような軍頭引見司に属していたものもあつたであらう。このように衙司には刑罰によって貶されたものもいたことは、元豐の官制改革でこの衙司が刑部の都官に歸した³³⁾ことと関連があるものであらう。

更に宋会要・職官の三司・衙司の仁宗・天聖八年（1030）二月の条によると、三司に詔して、今後州府軍監は更に衙前人を發遣して三司に赴いて、軍將・大將に充ててゐるのを許さず、もし三司軍將・大將が欠けて少くなつたときには、三司をして上奏させて指揮を取らせることとした。従つてこれより前には、州府軍監の衙前が多く三司軍將・大將に充てられていた。これについてはこの文の続きに

先是諸州軍衙前・軍將・承引官・客司・并衙職員、如願充三司軍將・大將者、自來不曾犯徒刑、家業及二百千以上、諳會書算之人、由發赴省、元係職員、即与三司大將、係承引官・客司・軍將、並与三司軍將、本戸下合当差充里正、即無免放、於乾興元年、省牒逐路轉運司、衙前軍將、承引官・職員等、願充（軍）大將者、並且權住、今遂詔罷之、

とあつて、これより前には諸州軍の衙前軍將及び承引官・客司と衙職員即ち都知兵馬使・都押衙等で三司軍將や大將を願うものは曾つて徒罪を犯さず、家業物力が二百貫以上あり、書算に通じてゐるものを三司に送り、もとの衙職員は三司大將とし、軍將と承引官・客司は三司軍將に充ててゐた。そしてこれらの戸の里正の役を免除してゐた。然し乾興元年には三司から各路轉運司に牒して、衙前軍將・承引官・職員で三司軍將・大將を願うものは權りに止めさせてゐた。これは里正の役を免除されてゐるものが多かつたためであらう。そこでこの天聖八年二月、この制を廢止したものであらう。然し「続資治通鑑長編」^{卷一}景祐元年（1034）二月癸酉や宋会要・職官・牙職の景祐元年二月二十五日によると、里正の役を終つて衙前に充てられた里正衙前の役が、重くて破産するものが多かつたので、官を遣して三司とこれを議せしめた。そのため權三司使范諷等がいて、川峽・閩広・吳越の諸路では旧制に依る外、余路では衙前を募つて、三年に満ちて徒罪を犯さず、官物の結繫のないものは、上京して三司軍將に補任させようとした。そこで詔して、これに従つたが、もし三司軍將が人に闕（欠）くるに至らなければ、しばらく招募を止めることとした。従つてこれらの路では招募衙前（^{投名衙前}）を用いて、三年の後これらを三司軍將に補することとした。このようにして三司軍將には諸州の投名衙前も充てられた。

このように三司軍將・大將には使臣の罪を犯して降されたものや諸州の衙前も充てられてゐた。そして神宗の熙寧七年三月には前述の如くそれらの額が千五百人と定められた。然しその後三司の軍將・大將は人数が足らなくなつた

ようである。宋会要・漕運の元豐二年（1079）十月二十七日の条によると、汴河及び江南・荆湖の綱運を管押するのは、七分は三班使臣とし、三分は三司軍將・大將・殿侍を差することとした。これは三班使臣の人員は多いが、三司の軍將・大將は不足して庫務の綱運に人を闕くので、三司が議して、軍將・大將を使臣に代えたためであった。更に衙司の職員の叙遷の制については、「宋史」職官志の叙遷之制・流外出官法の三司には、

衙司、都押衙、三年出奉職、衙佐三年出借職、通引官・行首司、五年出奉職、

と見えて、衙司の都押衙は三年にして三班奉職に出で衙佐は三年にして借職に出で、通引官・行首は五年にして三班奉職に出でた。この中、都押衙については前述の如く諸州都押衙が三司大將になり、軍將が三司軍將になっているので、衙司の都押衙も三司大將がなっていたものであろう。衙佐については前述の宋会要・職官・三司・衙司の天聖七年十月の条に、

詔三司、衙司都押衙、依旧選差人、充其衙佐、自今省罷發遣、歸本司、仍選差飲料或厨料後行二人、充手分、と見えていて、衙司の都押衙には衙佐がいたが、今後飯料或は厨料の後行二人を選差して、手分に充てさせた。従って衙佐は前章の人吏系統の後行等がなっていたようである。⁽³⁸⁾

要するに衙司には軍將・大將が属しており、これらは三司の色々な役を管理していた。そこで衙司はこれらの差使を優輕・重難と短差に分けて、適当にこれを組合せて、軍將・大將に均しく負担させていた。これらの軍將・大將には武官で罪を犯して降職されたものと地方の諸州の衙職員・衙前軍將・承引官・客司等の補任されたものとあったが、その後には後者はやめられた。然し諸州の投名衙前等はこれに充てられた。これらの軍將・大將は年数によって、三班奉職等になった。又衙司には衙佐といって、人吏も置かれていたようである。

五 結 語

以上考察してきた所をまとめながら、結論を述べることとする。

宋初には五代の制を踏襲して、三司使が置かれたが、その後これを三部に分けて、塩鉄使・度支使・戸部使を置

き、或は天下を十道に分けて、左右計・總計使を設けたこともあった。然し真宗の咸平六年以後には三司使を置くことに決めた。宋初の三司使や塩鉄・度支・戸部使・左右計・總計使等には多く武官も任用されたが、真宗の中期以後には全く文官が任用された。そして宋初から真宗朝までは三司使には両省五品以上の官が用いられ、その中には直に宰相となったものもあり、その地位は高かった。仁宗朝以後になると、三司使もいたが、樞三司使が多くなり、樞造・三司使も置かれ、神宗朝にはこれが多かった。そこでこの時期には両省五品以上もなったが、これ以下の官や兩制・學士が多くなり、神宗朝の樞造・三司使には學士の下の特制がなかった。従って三司使の地位も漸次低下してきた。即ち仁宗朝には三司使から直に執政になるものが多かったが、神宗朝には初期を除くと、直に執政になったものはなかった。三司使で久任したものは多く成績をあげたが、これは全体から見ると非常に少なかったようである。

三司の中の三部や子司には會計や書記を行う人吏が多数置かれていた。これらの人吏には姦猾なものが多かったで、宋初には地方の諸州の人吏を三司に任用し、或はそれらの人員を整理して、その額を定めた。然し後には人吏が團結して、この人員整理に激しく反対したため、これはあまり行われなかったようである。ただ宋初にはこれらの人吏の意見を徴して、事務の改革を図ったこともあった。これらの人吏は多く賄賂を取っていたので、神宗朝に倉法が行われると、その禄を増給された。三司の人吏は年功によって武官に賂進して、その中にはかなり高い官になったものもいた。又この頃には在京の百司では人吏が局毎に蒼頡を守護神として、毎年秋に賽神会を行って、その團結を図り、共同の利益を守っていた。従って三司で人吏整理が行われたとき、これらの激しい抵抗に遇ったのも、これらの間にこのような團結ができていたためであろう。かような團結は、元代になると地方では商人の行と同じく、曹行という組織になっていた。

三司の衙司には多数の大將・軍將が属していて、各地の漕運に従い、騎案の牧養や都水監の河川工事・軍器監の工匠の教育等を行い、又左右廂店宅務の專知官となって、その錢穀を掌り、店宅を修築し、或は酒坊の経営や内蔵庫の管理等も行っていた。衙司はこれらの差使を優輕と重難とに分け、これに短差を組合せて、大將・軍將の負担を均平ならしめていた。これらの大將・軍將には武官の罪によって貶されたものや地方の諸州の衙職員・軍將・承引官・客司等もなっていたが、後には後者は里正の役を免除されていたため罷められた。ただ諸州の投名衙前はこれらになる

のを許したようである。これらの大将・軍将も年功によって武官になっていた。又衛司にも衛佐といって、人吏も置かれていた。

要するに三司は唐宋五代の節度使体制と同様な構成をもっており、宋はこの制を襲ったが、宋では三司使は始終変っており、時代を降ると共にその地位が低下してきた。殊に神宗朝に新法が行われると、その財政権が縮小され、遂に元豊五年解体された。これに対して三司の中には節度使体制に見える孔目官系統の人吏と衙前軍将・衙職員に当る軍将・大将がいたが、かれらは三司使以下が始終変っているのと異り、永い間その任にあった。そこで三司の事務は実際には人吏と軍将・大将特に人吏によって行われており、かれらの間には固結もあって、その地位を強化してきた。そこで三司が解体されて、国家財政が各官庁に分散されても、これらの人吏等は中央官庁の下で牢固たる勢力をもっていた。従って北宋では三司は解体されても人吏等の勢力は確立していた。これは宋代の地方の州県でも人吏が隠然たる勢力をもっていたことと共に、宋代財政史の上で注意すべきことである。(昭和四〇・二〇・二二)

1 拙著「宋代経済史研究」一〇五代節度使の支配体制・序説参照。

2 拙稿「北宋における三司の興廃」(「駒沢史学」六)参照。

3 同上参照。

4 「玉海」卷一八六食貨・宋朝三司使参照。

5 「太宗実録」卷三一雍熙元年九月辛未参照。

6 同上卷三一雍熙元年九月壬申参照。

7 同上卷四二雍熙四年十月壬辰参照。

8 同上卷四三雍熙五年二月戊申参照。

9 「皇宋十朝綱要」卷二六太朝の三司使によると、張雍と董儼との間に魏庠の名が見えている。

10 「玉海」卷一八六食貨・宋朝三司使参照。

11 「皇宋十朝綱要」卷三真宗朝の三司使によると「張雍・張諫・上官正」とあって、張諫が見えるが、張諫についてはよく判らない。

12 同上真宗朝の三司使には林特と馬元方の間に馬元吉が見える。馬元吉が三司使になったかどうかはよく判らない。

- 13 これについては宮崎市定「宋代官制序説」（佐伯富「宋史職官志索引」所収）参照。
- 14 宋会要・食貨・水運の神宗・治平四年十一月十四日には權發遣三司使公事邵必の言が見える。
- 15 「皇宋十朝綱要」卷八神宗朝・三司使の中には邵必と呉充の間に王陶が見えている。
- 16 同上によると、李承之と安燾との間に趙高が見えている。
- 17 「職官分紀」卷一三・三司の使の条参照。
- 18 「司馬溫公文集」卷二三論財利疏参照。
- 19 「職官分紀」の三司の推官巡官参照。
- 20 「容齋隨筆」四筆卷一四祖宗親小事の条参照。
- 21 「職官分紀」の三司の三部諸司属吏の条参照。
- 22 「統資治通鑑長編」卷一八二嘉祐元年三月癸丑によると、このとき塩鉄副使李參は湖北安撫使に遷った。
- 23 宮崎市定「王安石の吏士合一策―倉法を中心として」（「アジア史研究」一所収）参照。
- 24 この曹司即ち州や県の人吏については、拙著「宋代經濟史研究」一一宋代州県の職役と胥吏の發展二宋代州県の職役とその變質過程(2)宋代州県の人吏参照。
- 25 州の衙前については同上拙著の宋代州県の職役と胥吏の發展二宋代州県の職役とその變質過程(1)宋代の衙前参照。
- 26 なお王安石の「臨川文集」卷八七馬知節の神道碑参照。
- 27 なお宋会要・食貨・漕運の天聖八年三月三日の三司の言参照。
- 28 なお同上天聖六年九月の嘉州の言及び同七年六月七日の三司の言参照。
- 29 拙稿「北宋における三司の興廃」（「駒沢史学」六）参照。
- 30 同上参照。
- 31 同上参照。
- 32 この「六十分の重難」の六十分の分とは、官が一分毎に幾らかの錢を支給して、その漕運の費に充てさせたものをいうが、重難の場合には官の支給する費用はその漕運の費に足らないのである。（前掲拙著「宋代經濟史研究」の宋代州県の職役と胥吏の發展の中の宋代の衙前の項参照）。
- 33 「宋史」職官志の刑部の都官郎中・員外郎によると、これは徒流・配隸を掌り、天下の役人と在京百司の人吏の籍や副尉（軍

・大将)の差便を行っていた。なお五代宋初には武將で罪によって州の衙前に貶されたものが多かった。これについては前掲拙著「五代節度使の支配体制の衙前の条参照」。

34 このことは前述の宋会要・漕運の天聖三年十月二十七日の舒州の言によっても判る。

35 この文は「統資治通鑑長編」卷一〇九天聖八年三月庚辰にも見えるが、これには「諸州軍の承引官・客司・衙前の三司に赴いて軍大將に補せられるものは、例として里正の役を免ずる」とある。

36 乾興元年十二月には当時役を免んぜられていた官僚や衙前の田を制限する限田法が行われた。本文はこれと関連があるものであろう。拙著「中国土地制度史研究」六宋代荘園制の発達参照。

37 通引官・行首は共に通引司に置かれたもので、行首も通引官と同じく渉外事項を行っていた。前掲拙著の五代節度使の支配体制の客將・通引官参照。

38 なおこれについては同条の熙寧七年三月九日の条参照。

39 前掲拙著「宋代経済史研究」一一宋代州県の職役と胥吏の発展の中の宋代州県の人吏と南宋州県の胥吏の性格参照。